

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月14日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520360

研究課題名（和文） ディアスポラにみる文学の再発見と蓄積
—アーカイヴ化されるマイノリティの記憶—研究課題名（英文） Rediscovery and accumulation of literary works in the diasporas
—Their archives of Minority- Recollections

研究代表者

鈴木 道男（SUZUKI MICHIO）

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：20187769

研究成果の概要（和文）：ディアスポラ集団の結束の心的紐帯として、どの時代にもそれぞれに重要な役割を果たしてきた、マイノリティ自身による文学作品について、4つのマイノリティを例に、1)マイノリティ集団によるその収集および保存の実情、2)それに対するマジョリティによる援助と干渉、現在のアーカイヴの学術性とその保障、アーカイヴの利用とそれに基づく研究の実情、および3)グローバル化したディアスポラにおけるそのアーカイヴの意義について検証した。

研究成果の概要（英文）：The literary works written by the diaspora minorities have been functioned as solidary bands of the each members. We inspected the following in 4 different minorities. 1) Situations of archiving. 2) Aids and interference of the majorities in making archives. 3) The importance of the archives in the recent global situation, in which many of diaspora minorities redisperate.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |
| 2010年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学、文学論

キーワード：ディアスポラの紐帯、アーカイヴ、文学作品

1. 研究開始当初の背景

我々の研究グループは、ディアスポラ集団がその存在を示し集団を維持するにあたり、特徴的に見られる文化行動として以下の3点を文学研究の側から明らかにし、その具体的な状況を吟味してきた。

(1) ディアスポラの維持にはアイデンティティの堅持が不可欠であるが、ユダヤ人にとっての旧約聖書のように、ディアスポラの

求心性の象徴というべき機能を果たす文学が存在すること

(2) グローバル化のなかで、移動の自由と文化比較に関する知見が飛躍的に拡大し、ディアスポラの成員は、その所属すべき文化とアイデンティティを自ら選択せざるをえない機会に必ず遭遇する。その際に、陰に陽に文学が参照されて、個々の行動の決定に際して文学が醸成した基本的情調が大きく影響すること

(3) しかしながらそのアイデンティティーは、歴史的に観察すると、時代とマイノリティーのおかれた状況とともに変化している。その、変容しながらも紐帯となり続けるアイデンティティーの参照規範を、更新しながら提供し続けることこそ、実は文学の役割となっていること

以上の成果に至るまでの一連の研究のなかで、我々は現在のディアスポラ集団のアイデンティティーの紐帯となる重要な文学作品の存在と、そのディアスポラ集団内部での格別な扱いに特に着目してきたのだが、実はそれのみならず、各ディアスポラが、遡りうる限りの史料とともに、あらゆる時代に著された文学を掘り起こし(再発見)、収集・保存・蓄積し、かつ叢書として出版を継続する「アーカイヴ化」に対して異常なまでの努力を傾注している事例に多く遭遇した。すなわち、ディアスポラにおいては、その成員の少なさにもかかわらず、多くの文学作品が活発に生産されることが少なくないのだが、母集団の文学史上ではトリヴィアルなものとして一般には軽視されるものであっても、ディアスポラ集団にあっては、その成員によるもの、またはその成員に関するものである限り、無視されずに登録と記録、保存が行われているのである。

こうした作業そのものが、文学をめぐるディアスポラ・アイデンティティーが形成され、紐帯が強化される動きの一環をなすことは論を俟たない。しかし、意外なことには、このような事業を推進する主体と、財政的援助者の有無とその意図、そして何よりもその目的に対する意識は、多様なディアスポラにおいて決して一様なものではないことが、強く窺われるのである。アーカイヴ化の作業は、マイノリティー重視を謳うか否かの、マジョリティーの政府あるいは母集団の政府の態度如何によって、あるいは学術的アプローチを装った特定のイデオロギー勢力による操作によって、あるいは逆に、それに対抗するために、実に様々な意味を与えられ、かつ変貌することを余儀なくされてきた。本研究は、大別して4つの異なる事例研究をもとにこの「アーカイヴ化」の実情を明らかにし、かつそのディアスポラの存在に対する意味を、その内部及び外部から検証しようとするものである。その際、ディアスポラは、こうしたアーカイヴから自らの記憶を引き出して共有するのであるから、この記憶の泉に対して、様々な勢力が手を伸ばし、書き換えを試みてきたことに留意し、それを具体的に描出しなければならない。またこれにもかかわらず、形成されたアーカイヴはその製作者の意図を離れて様々に利用され、研究と議論を生んでいる。その意味で、各ディアスポラ集団に

のみ開かれているものではない。このことも視野に収めておかなければならない。

2. 研究の目的

上記のように設定した研究のテーマをめぐる議論の過程において、取り組むべき具体的な作業は以下の4点に集約された。これらはいずれも、我々のこれまでの研究の延長線上にあるものとして、我々全員が共有している研究課題でもある。また今までの研究経験から、成果をあげることが可能であると判断されたものでもある。

(1) アーカイヴ作成の歴史と実情の調査。とくにディアスポラ集団の手による自らの「記憶」の探求にかかるバイアス、すなわちアーカイヴ化における取捨選択および過去の文学の「再発見」のあり方と自らのディアスポラ・イメージの形成に関する調査と意味の検証(アーカイヴ形成と操作の問題)

(2) (1)に関して、特にマジョリティーの政府など、外部からの干渉及び援助とその目的の検証(外的圧力と援助の問題)

(3) ディアスポラ自身による過去の記憶の洗い直しと、開かれた議論の形成を目指した学術的アーカイヴ形成と、それに基づく研究作業の事例と問題点の洗い出し(アーカイヴの学術性に関する問題)

(4) インターネット上のホームページによるディアスポラ成員のルーツの公開と、世界に散った「同胞」からの情報収集作業(仮想空間におけるルーツ探し)、およびその文学アーカイヴとの関係の検証(アーカイヴ化された文学と仮想空間のディアスポラをめぐる問題)

これら(1)~(4)の問題について、状況に即して力点を変えながら、研究代表者及び分担者の専門領域の各ディアスポラの様々なアーカイヴを対象として具体的に明らかにする。いずれも、過去の我々の研究において、問題点としてすでに浮上していたものである。

ディアスポラ自身による自文学の「アーカイヴ化」の意味を問う研究は、一部の歴史的な研究、特にドイツ系マイノリティーの研究の中にサブテーマとして散発的に見られるが、これを文学研究のテーマとして取り上げ、様々な事例をもとに相対化し、検証する研究はまだない。本研究は文学と時の政治、すなわちマイノリティーの対ディアスポラ政策との接点を描出するものともなり、文芸社会的色合いが濃いものとなるが、文学のアーカイヴとその政治性を広い方面から問う点に獨創性がある。

また、一部のアーカイヴはインターネットからのアクセスを意識し始めたもの(世界の

同胞に開かれたアーカイヴ)となっており、これが世界に分散するディアスポラたちのアイデンティティー形成にどのように関与するものとなりうるかを問う研究は、まったく新しいものである。

歴史学上の史料とは異なる、文学の「アーカイヴ化」に関する偏り、操作、干渉という概念が、本研究においてはじめてディアスポラ論に対して実例とともに提示され、これらとディアスポラの「記憶」との関係が論じられることとなる。これはオーラル・ヒストリーとは違った意味で、近年活発な「正史」を対象としない、マイノリティーの「記憶」に関する歴史的アプローチの手法による研究に対しても話題と新しい研究分野を提供する。

3. 研究の方法

本研究の目的達成のための具体的骨格は、ディアスポラ集団が形成した文学アーカイヴの実地調査・インタビュー調査および文献による調査である。極力多様なディアスポラ文学アーカイヴの多面的把握とその相対化を目指すため、異なるディアスポラを研究対象とする4名の研究者の共同研究の体制を組んだ。各研究者の事例研究に基づき、発表と討議の場を随時設けた。それをうけて研究代表者が議論と研究実施計画のとりまとめを行った。各研究者の分担テーマは以下の通りである。

(1) 研究体制

- ① 鈴木道男：ズィーベンビュルガー・ザクセン文学の詳細なアーカイヴ化と出版の意味について

ザクセン人と呼ばれるトランシルヴァニアのドイツ系住民には、中世以来、史料のみならず、自らの文学作品の保存と整理において他のディアスポラには類を見ないほどの精緻な蓄積の伝統があり、現在もそのアルヒーブの叢書化と活字化が精力的に進められている。しかしその営為に対する自他による意味づけと評価は、決して一貫してはいない。現代史に直結する、19世紀の「ハンガリー化」以降から現在までに焦点を当て、アイデンティティーの変遷と文学のアーカイヴ化、及び出版の関係を探る。さらに、ドイツ国内において2006年以来進行している、ドイツ系マイノリティー同郷人会の付置アーカイヴの大学組織への編入の動きについて詳細を踏査した。

- ② 山下博司：南アジアにおけるタミル語文学のアーカイヴ形成

特にシンガポールのタミル人ディアスポラに焦点を当てた。多民族国家を標榜するシンガポールでは、国家の主導でマイノリティー

文学のアーカイヴ化が進められている。しかしそこには、国家統合の合言葉のもとに、マイノリティーの自立性に制限を加えようとする意図が見え隠れしていたため、文学的伝統の意味づけを再編しようとするこうした動きと、アーカイヴの関係を吟味した。

- ③ 藤田恭子：第二次大戦後のルーマニアにおけるユダヤ系ドイツ語文学

ショーアーの記憶と共有される詩的形象

第二次大戦後においても、戦間期以降と同様、ルーマニアのユダヤ系ドイツ語文学には当局の監視が続いた。戦後西ドイツへの亡命に成功した作家A. キットナーは、多くのユダヤ人詩人の作品を収集整理していたが、その原稿は奇跡的に没収を免れ、今に伝わっている。このキットナー・コレクションの現代ドイツ語文学における重要性を踏まえつつ、そこから窺うことのできる、マイノリティー集団としてのユダヤ人の詩人たちが共有した形象の意味を問うた。

- ④ 佐藤雪野：チェコにおけるマイノリティー文学のアーカイヴ

ディアスポラとしてみたロマに焦点を当てる。チェコはルーマニアやスロヴァキアなどと並んで、人口比に占めるロマの比率が高いことで知られる。ロマがマイノリティーとして社会の成員と認知されるに至ったのは近年のことで、ロマ自身によるアーカイヴの形成も盛んではない。しかし現代に至って、急激にチェコのロマ像は変貌しており、ロマの文学作品が書かれ、また、インターネットにおけるロマからの発信も盛んになっている。チェコのロマにおいては、自身の手による文学アーカイヴの展開が、マジョリティーの収集したロマに関する文学に由来するロマ像と拮抗し、その変更を強いようとしているのである。またそれは、ロマの自己規定にも影響している。このような新しい展開の社会的意味を探った。

4. 研究成果

初年度及び次年度において、各マイノリティーが、それぞれのアーカイヴ形成に示している非常な労力と集積の実態を再確認し、とりあえずの認識の共有のための研究会を催し、また各マイノリティー内部の研究者との連絡を密にすることができるようになった。この状況を受けてフィールド調査の取りまとめの討議、「アーカイヴ形成と操作の問題」、「外的圧力と援助の問題」、「アーカイヴの学術性に関する問題（アーカイヴの閉鎖性に関する問題も含む）」に関する討議と認識の共有に重点を置きつつ、「アーカイヴ化された文学と仮想空間のディアスポラをめぐる問題」についての討議を開始し、以下を遂行し

た。

・「アーカイブ形成と操作の問題」、「外的圧力と援助の問題」、「アーカイブの学術性に関する問題」に関する論文の執筆・個別領域の資料収集

・研究代表者鈴木はミュンヘン大学付属東方ドイツ人会館付属研究所の研究員アッカー博士とともに、同郷人会アーカイブの大学による接収に関する討議と情報収集を、メディアを介して継続的に遂行した。なお、平成23年3月の大震災のため、一部の機器の納入が停止したために資料の収集に差支えが出たが、次年度で取り戻した。

最終年度、作業を(1)アーカイブ形成とその操作の問題 (2)外的圧力と援助の問題 (3)アーカイブの学術性に関する問題 (4)アーカイブ化された文学と仮想空間のディアスポラをめぐる問題に集約している。これらに関して、前年度までにフィールドにおける調査の大半を終え、若干の補完を行った。また、「アーカイブ化された文学と仮想空間のディアスポラをめぐる問題」についての討議を本格化し、研究の重心を以下を中心としたものに移行した。

研究の具体的成果は以下にまとめられたとおりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

①佐藤雪野、チェコの地方制度と連邦制、佐藤勝則編著『比較連邦制史研究』、査読無、2010年、127-154

②山下博司、シンガポールの国民統合と宗教間対話、東方、363、査読有、2010年、509-510

③ 藤田恭子、南東ヨーロッパ発のGermanistik—ジョルジュ・グツ教授の特別寄稿に寄せて、東北ドイツ文学研究、52、査読有、2010年、133-135

④山下博司・岡光信子、インド民話から現代オペラヘーション・アダムズ作<フラワリング・ツリー>のエコロジー的構想などをめぐって、東方、26、査読有、2011年、163-180

⑤山下博司、インディアン・スピリチュアリティと現代—ヴェーダーンタ的一元論の再編とその今日的意義をめぐって—、宗教研究、365号、査読有、2010年、325-348

⑥佐藤雪野、レンカ・ライネロヴァーの最後のメッセージ—最後の作品のドイツ語版・チェコ語版の比較—、東北ドイツ文学研究、53、査読有、2010年、19-37

⑦曾根原理・鈴木道男、東北大学図書館蔵カール・レーヴィット関係資料について、東北大学史料館紀要、第7巻、査読無、2012年、4

6-65

⑧山下博司・岡光信子、シンガポールのヒンドゥー寺院における女神祭祀とインド叙事詩—<火渡り>の儀礼シークエンスを中心に—、『東方』、27、査読有、2012年、193-223

⑨藤田恭子、ドイツ語圏文化の現在—ベルリンの壁崩壊・東欧革命後20年の変化を読む—、日本独文学会研究叢書、080号、査読有、2011年、4-18

⑩佐藤雪野、チェコとスロヴァキアのロマン—中欧における共生の可能性—、岩波書店「思想」4月号、査読無、2012年、92-106

〔学会発表〕(計1件)

①藤田恭子、ルーマニア・ドイツ語文学概説—その歴史と現在における「多様性」について—、2011年度日本オーストリア文学会(招待講演)、2011年9月4日、関西学院大学

〔図書〕(計1件)

①鈴木道男編著、一、「ディアスポラにみる文学の再発見と蓄積—アーカイブ化されるマイノリティの記憶—」、2012、68

6. 研究組織

(1)研究代表者

(1)研究代表者

鈴木 道男 (SUZUKI MICHIO)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：20187769

(2)研究分担者

山下 博司 (YAMASHITA HIROSHI)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：20230427

藤田 恭子 (FUJITA KYOUKO)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：80241561

佐藤 雪野 (SATOU YUKINO)

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：40226014

(3)連携研究者

()

研究者番号：